四 仮名

万葉仮名（正倉院文書）

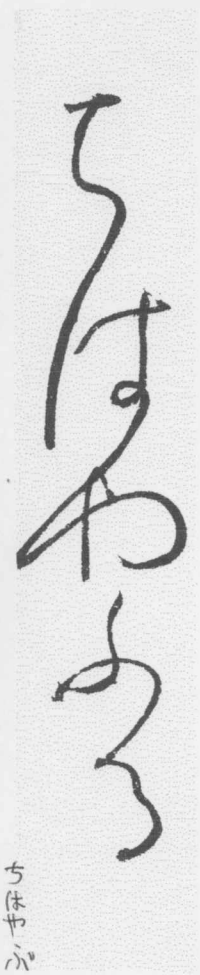
於保末之末須おほましますし

草仮名（伝小野道風　秋萩帖）

安幾破起乃あきはぎの

女手（伝小野道風　継色紙）

可勢倶あまつかぜく



平仮名（伝紀貫之　高野切第二種）

ちはやぶる

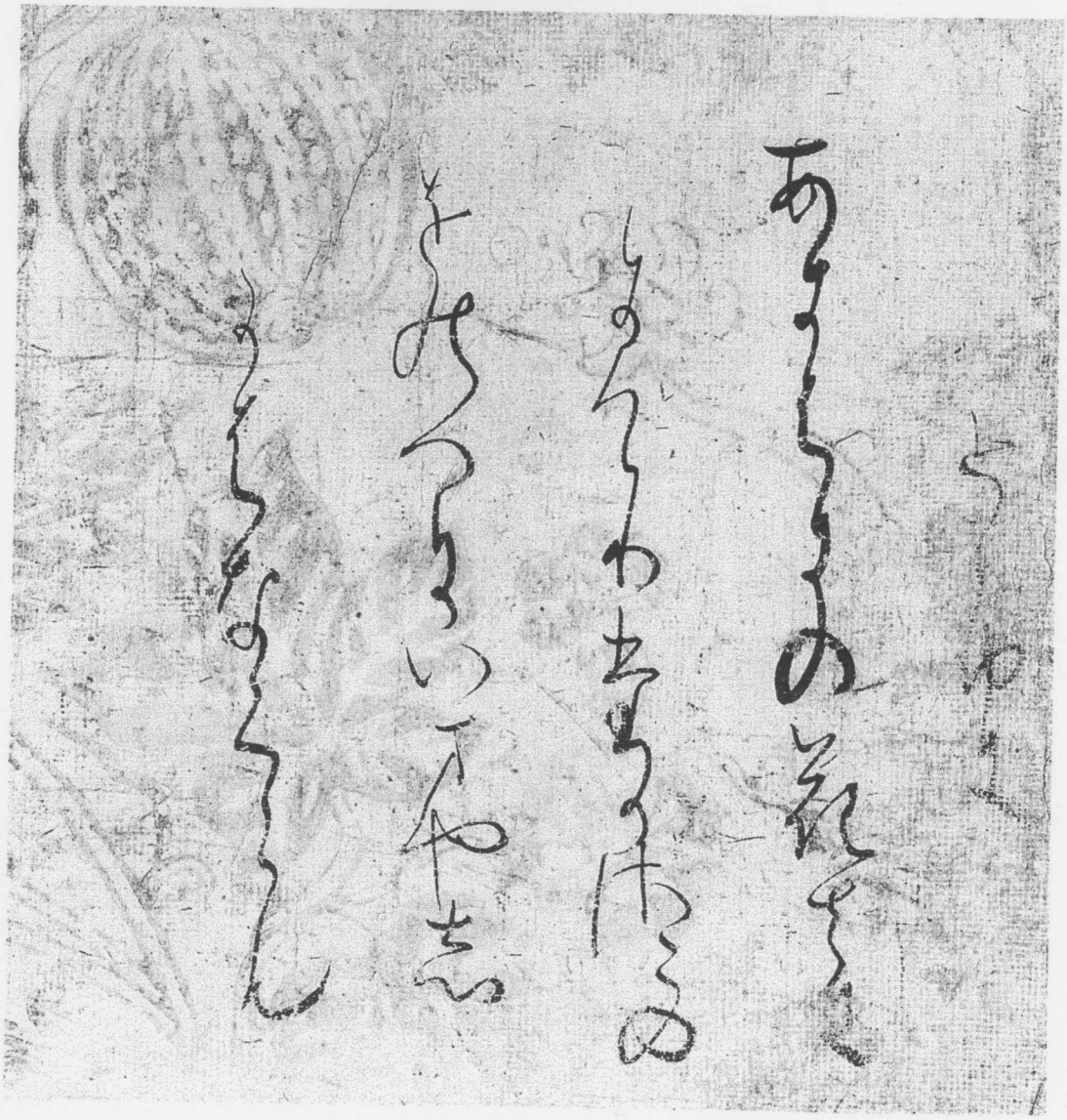
[1] 仮名の成立

2013(H25).10.25

日本の文化は、古くから中国の影響を強く受けてきました。中国から漢字が伝えられると、独自の文字を持たなかった我々の祖先は、その漢字の音を借りて日本語を書き記すようになりました。これが仮名の始まりです。主に、漢字一字に一音をあてる用法は、奈良時代に作られた「万葉集」の表記に用いられたため、後に「**万葉仮名**」と呼ばれることになりました。また、「万葉仮名」は、奈良時代には漢字の楷書または行書で書かれ、「**男手**」「**真仮名**」などと呼ばれました。その後、平安時代に入ると、「万葉仮名」は草書で書かれることが多くなり、「草」「草仮名」と呼ばれました。さらに、その後も書きやすさを求めて簡略化が進み、平安時代中期になると、字母（字源）の姿が分からぬほどに略された仮名が完成するにいたりました。「**女手**」と呼ばれるものです。平安朝の女性の間で日常使われたことからこの名があるのですが、この「女手」は、その使いやすさからしだいに男性にも使われるようになりました。そして、和歌や物語などの表記を通して、日本独自の美を備えたものへと開花していくのでした。

仮名は、明治時代になると、一音一字に統一されます。それが現在私たちが使っている「**平仮名**」です。そして、それ以外の字体の仮名は、「**変体仮名**」と呼んで区別するようになりました。また、「**片仮名**」は、九世紀の初めごろ、漢文や仏典の訓読の補助として生まれました。速写する必要から、漢字の楷書体の一部を取って作られたものです。

コラム



伝紀貫之　寸松庵色紙（すんしょうあんしき）　平安時代（原寸）

【読み方】　としゆき（支）／あきはぎの花さき（支者支）／にけりたかさごの（尓介利堂可佐）／をのへにいまやし（能尓万志可者）／かはなくらん

仮名の美

仮名の特徴は、**連綿**（れんめん）の美しさ（時間性）、墨の潤（じゅん）渇（かつ）の美しさ（立体性）、**散らし書き**の美しさ（空間性）、そしてそれらを支える線の多様な美しさにあります。

仮名は、文字が簡素なだけに、文字を書き連ねていく連綿によってさまざまなリズムが生まれます。字母の異なる文字を用いることで、同じ言葉でもいくつもの表現が可能となります。また、一度筆に墨を含ませれば、多くの文字を書き続けることができ、**墨継ぎ**（すみつぎ）から渇筆（かっぴつ）までの墨の長い息づかいが生まれます。そこに生じた墨の潤渇は、作品に近景、遠景の立体感をもたらします。さらに、仮名には行頭・行脚の高さに変化をつけたりする散らし書きの美しさがあります。これは、日本人独自の美意識が育て上げた美しさといえます。

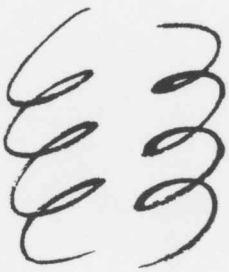
上の寸松庵色紙は、一行目の「としゆき」（この歌を詠（よ）んだ人の名前）を渇筆で書き、二行目で墨を入れ、和歌を行頭の高さを変えた四行に散らしています。連綿、潤渇、散らしそして粘りのある線の美しさを備えた作品です。

2 仮名の筆使い

横の線

縦の線

ら線

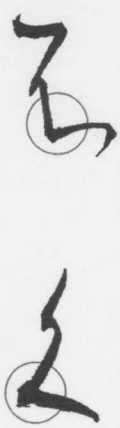


S状線

結びの線

【起筆】筆の穂先を突き込んで書く。

【転折】転折では突き込むようにして折り返す。



【ねじれ】穂先を立ててねじる。

【かえし】穂先を立てて返す。

【結び】穂先を突きあてて抜く。

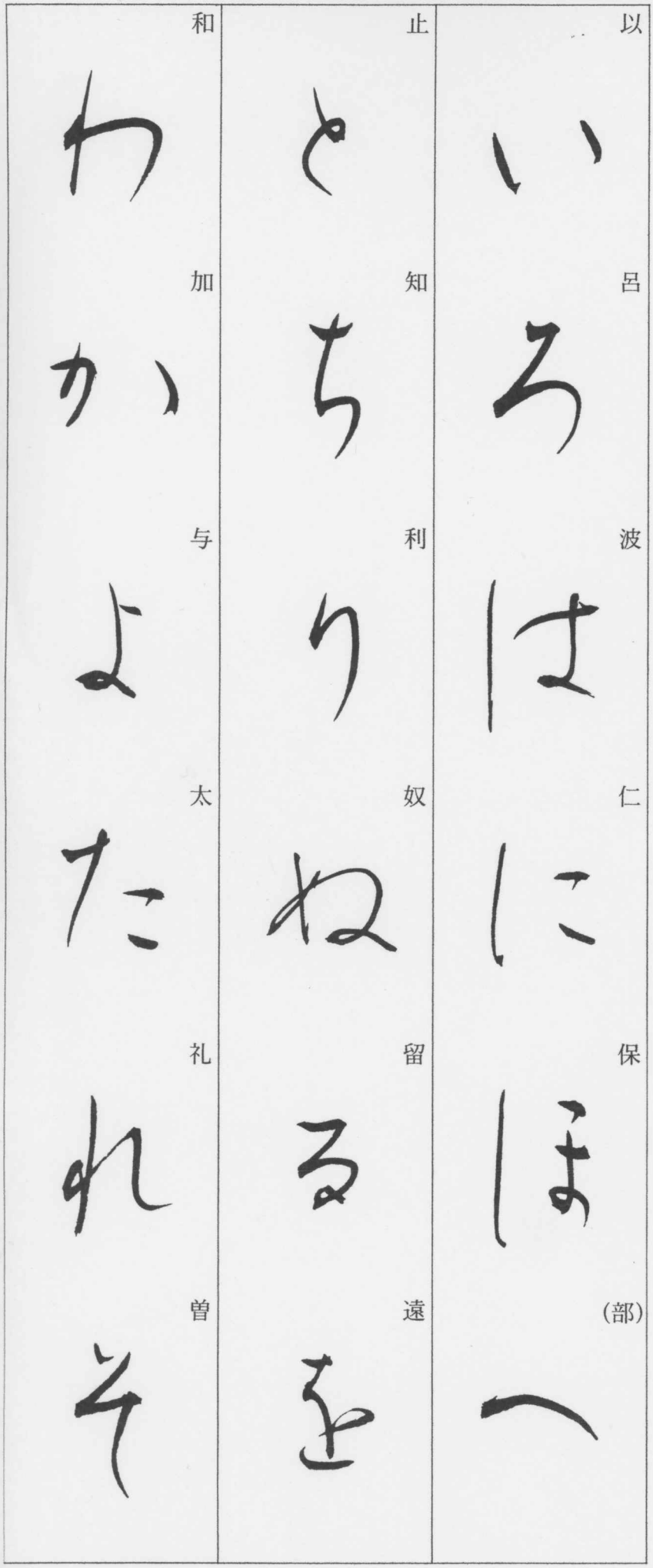
（○印は、それぞれの代表的な箇所につけています。）

[4] 平仮名の単体

平仮名は漢字の草書体がさらに簡略化されて生まれてきたものですから、その字母（字源）の影響を受け、大きい文字として生まれた仮名（「や、ゆ、ひ」など）と小さい文字として生まれた仮名（「と、る、め」など）があります。ところが明治三十三年（一九〇〇）、教育上の配慮から、小学校で使う仮名が一音一字の方針のもとに統一され、ほぼ同じ大きさで書かれるようになりました。それが現在の「平仮名」です。しかし、仮名本来の美しさは、大中小の文字が調和した文字の連なりにあります。

仮名の学習に欠かせない「いろは歌」は、十世紀末にできた今様歌です。「色は匂へど散りぬるを　我が世誰ぞ常ならむ　有為の奥山今日越えて　浅き夢見じ酔ひもせず」の四十七文字に「ん」を加えると全文字が扱えます。

ここの学習では、平仮名単体のそれぞれの文字の大きさに配慮しながら文字の基本を学びましょう。字母について諸説あるものは（）で示しました。



恵	左	計	為	(川)
ゑ	さ	け	ぬ	つ
比	幾	不	乃	祢
ひ	き	ふ	の	ね
毛	由	己	於	奈
も	ゆ	こ	お	な
世	女	衣	久	良
せ	め	え	く	ら
寸	美	天	也	武
す	み	て	や	む
无	之	安	末	宇
ん	し	あ	ま	う

[5] 連綿

一字一字独立させて書いた文字を単体（たんたい）というのに対して、二字・三字あるいは数文字を続けて書いたものを連綿といいます。仮名においての連綿は、仮名の単体をつなげてできたものではなく、漢字の草書体がさらに略され、仮名が完成する過程において生まれてきました。

連綿は、仮名の美を支える大切な要素です。練習するに当たっては、単体の平仮名のイメージを捨てて、連綿のリズムに浸（ひた）ってみましょう。連綿には、決まった規則というものはありませんが、連綿の仕方をいくつかに分けると次のようになります。どの場合も、文字を結ぶ連綿線を浮かせず、緩（ゆる）ませず、しっかりと書くことにより、続けて書いた数文字がひとかたまりになることが大切です。

次に示した連綿の例は、高野切第三種より集字したものです。

連綿の例

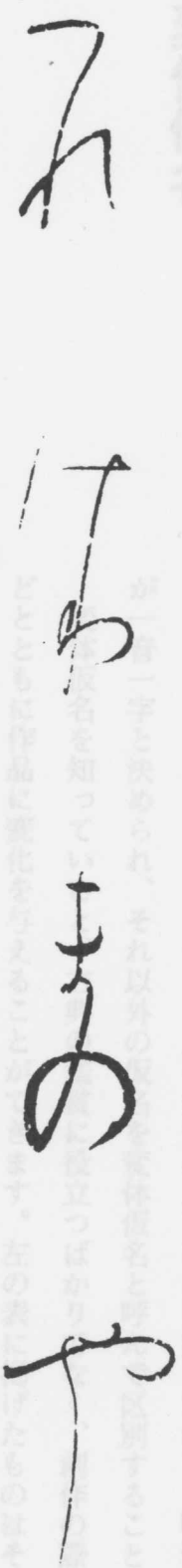
①収筆を力を抜かずに伸ばしていく。

あま　みや　はつ　ゆき

②上の字を書き終えたところでいったん止まり、はずみをつけて下の字の一画目を書き始める。

これ　との　たに（尓）　ふり

③上の字の最終画を伸ばして、下の字と一体化する。



つれ　利　けり　まの　やし

④上の字の最終画と下の字の一画目とを共有する。

ひと　うと　盤　いは　能　この

⑤三字連綿の例

はるの　那　よのな　をみて

⑥四字連綿の例

こゝろは　多　せたまひ　徒　つらゆき

54-2